



# 猫の返禮

水木京太

「西曆千四百九十二年、クリストファ・コロン  
ブス、アメリカを発見す。」

歴史の本にかう書いてあるまほり、それまで  
は誰一人としてアメリカなどいふ國のあるこ  
こを知つたものがありませんでした。

だからコロンブスの船が歸つて来て、海の  
なかに新大陸のあることを報告するに、ヨーロ  
ッパ中の人たちが、みんなびびりして、大さ

わぎをしたのも無理ではありません。もう、い  
たるところで、その評判で持ち切りのありさま  
でした。

「君、アメリカの話聞いたか。」

「ミてもひろい國だ。いふぢやないか。」

「このヨーロッパ全體よりも、やつと廣いつて  
いふんだから、おどろくね。」

「は、ひろいどころか。倍も三倍もある、途  
方もなく大きい國だ。」

「それに土地がゆたかで、年中夢が實つてゐる

るわけでもありません。——しかしこれまで人  
の行かない國だけあつて、めづらしい物産がた  
くさんあるので、土人から安く仕入れて歸るこ  
こが出来、おかげで大もうけをしました。

それに味をしめて一航海二航海さかさねるこ  
身代が見る／＼うちに太つて、たちまち町で指  
折の大金持になつたのです。

「うまいぞ、うまいぞ。」

アンサルドオはますます勢づいて、それか  
ら四度目の貿易に出かけました。ところが今度  
は速わるく、港を出るまきから天氣模様が変わ  
く、曇日ひどいあらしでした。船は木の葉のや  
うにさん／＼波にもまれ、帆もかゝいもめちやめ  
ちやにされて、なんぎな航海をつづけましたが  
幾日か荒海の中をたどつたすゑに、やつと見  
知らぬ島に吹き寄せられました。——そこは、  
いまかはい、カナリヤの産地として有名な、カ  
ナリイ島だつたのです。

## 二

アンサルドオが命から／＼上陸して、ほつと  
一休みしながら島の様子を眺めてゐるに、後の  
方で、へんてこなラツバの背がして、槍を持つ  
た男が五六人ばら／＼と駈けて來ました。

「しまつた。食人種のある島へ來たのかな。」  
はつと身がまへるに、意外にもその男ど

もはていねいに敬禮するではありませんか。

「さつきから、王様がお待ちかねです。どうか  
御殿の方へお出下さい。」

さきに立つて案内するものだから、アンサ  
ルドオも半分びく／＼ものでついて行きました  
森をぬけ野原を出るに、なるほど向うの丘には  
りつばな御殿があつて、玄關口に大勢の人が、  
自分を出迎へに出てゐるのが見えました。近づ  
くに、美々しい衣裳をつけた王様が、さもよろ  
こばしうに、アンサルドオの手をさつて、そ  
のまゝ奥の廣間に導いて行くのでした。

「こんなさびしい島へよく來てくれました。わ  
しは沖に船の姿を見て、今朝から待ちかねてゐ  
ました。あなたは一體どちらから來られたので  
すか。」

アンサルドオもすつかり安心して、あらしいの  
ために漂流したことを語りました。

「それはあぶないところでしたね。しかしこゝへ  
來たからは、もう心配はありません。不自由  
なものがあつたらんでもあけませう。どうか  
ゆつくりしてゐて、お國のイタリーの話や、そ  
のアメリカミヤらの話をして聞かせて下さい。」

離れ島のことにて、船の立ち寄ることもない  
ので、王様はじめ貴族の家來のものも、この珍  
客をよるこんで歓迎して、それお茶、それお菓  
子、それ果物さ、下にもおかず親切にもなす

んだつてね。」  
「夢もさうだが、牛も馬も羊も野ばなしで、國  
中にうよく／＼してゐるさうだ。」

「もつとすばらしいこことがある。なんでも山へ  
行くに、金の塊が石ころみたいにくらぶつて  
ゐるんだつて。」

「へえ、大したもんだね。どうだ、それを拾ひ  
に行かうぢやないか。」

「うん、ぐず／＼してゐて、ひみに取られちや  
つまらないな。」

「さうも。善は急げだ、さつそく出かけるこ  
しよう。」

「よし來た。さあ船の支度だ。」

また聞きの話はさうだが、それからそれと傳はる  
のですから、なんでもいゝこづくめの話にな  
つてしまひました。そこでイギリスやスペイン  
やオランダの港から、氣の早い連中がわれもわ  
れも先をあらそつて、アメリカへアメリカへ  
ミ船を乗り出すことになりました。

イタリーの貿易商人アンサルドオも、數々  
の耳よりなまうけ話を聞いては、ちつとして  
ゐられませんが、これも大急ぎで持船を仕立て新  
大陸に向つて、船を走らせて行きましたが、さ  
て着いて見るに、そこはおさぎばなしにあるや  
うな極樂世界ではありませんでした。海岸が寶  
玉の砂原でもなく山に金の塊がころがつてゐ

のでした。

だがアンサルドオは、實はお腹がべこ／＼だ  
つたので、早く御飯がいただきたくて仕様があ  
りません。やがておひるの時間が來て、「さあ  
どうぞ食堂へお出下さい。」と言はれたので、  
生き返つた氣持で、部屋へ案内されて行きまし  
た。

どつしりした大テーブルには、一めん美し  
い花がまかれて、ぶん／＼い／＼にほひをさせる  
し、銀の食器がびか／＼か／＼やいて、これから  
どんなうまい御馳走が盛りられるかを思はせるの  
で、アンサルドオは喉をぐび／＼させ、つばを  
のみこみ／＼王様ならんで坐りながら、いよ  
／＼食物の出るのを待ちかまへました。

たゞアンサルドオにふしぎでならないのは、  
五六人の貴族が手に杖を持つて、自分王様を  
をさりまいてゐることでした。これから、せつ  
かく大口あいて思ひ切り御馳走をたべようさす  
るのに、そば近くで見物されるのは、じやまつ  
氣でもあるし、護衛にしてはあまり業々しい思  
はれました。第一こゝは兵隊の守つてゐる御  
殿の、しかも奥深い食堂の中ではありませんか  
——アンサルドオはそのわけをたづねようとし  
ました。こゝ、戸が開いて給仕がぼや／＼の息の  
立つ大皿を捧げて、御馳走を運んで來ましたの  
で、銀のナイフを手にして、も一度つばを飲み



んきにぶら／＼遊んでをりました。  
いざ歸るまきになるま、もちろん王様は見送りに來られました。そして大事さうに小箱を渡して、別れの言葉をのべました。

「ジアコモさん、あなたからは数々の贈物ももらつて本たうにありがたう。こんな離れ島なので、何もお氣に入るものはないでせう。これはわしの一番大切に思つてゐるものですから、せめてこれを差し上げて御返禮にしたいと思ひます。どうかそのつもりで納めて下さい。」

ジアコモは、はじめその箱が小さいので、おや／＼これは少々勝手がちがふぞと思ひました。しかし王様が大事さうに手に握けてゐるのを見ても、よつぽど尊い品物かはひてゐるにちがひないを考へなほして、びよ／＼おじぎをして受け取りました。

「王様から御返禮なんかいたゞいては、まつたく恐縮です。でもせつかくのお言葉ですから、ありがたく頂戴いたします。ありがたうございませう。もうこみ上げてくるうれしさをおさへ切れませんでした。」

やがて船が港を出るのも待ちきれずに、夢中になつて小箱のふたをこぞあけるま、意外にも「キヤアさいつて二ひきの猫が、ミぼけた顔を出したぢやありませんか。ジアコモはあきれかへつて、氣が遠くなりさうでした。」

「畜生、王様のかたりのものめ。こんなぢら猫なんかつかませがあつて。箱を投げ捨てたジアコモは、ぢだんだ踏んで氣ちがひのやうに叫び出しました。「かたりどろぼう、うそつき——おれの財産を返せ。王様のどろぼう……」怒に目

### 小さな動物の力

虫なぞのやうな小さな動物にはからだに不相應な、おそろしい大きな力をもつてゐるものがある。最近の研究によりますと、コガネムシが物を引つづる力は、そのからだを馬ほどの大きさと計算すると、約馬二十一頭の力に相當するといひますから、おどろきます。ミツバチは、同じ割合で、馬三十頭分の力をもつてゐます。

家雞はマツチの棒を足でつまんだりします。この力業を、人間が雞に代つてやるとしますと、長さ八メートル半もある材木を肩でかつぐ割合になります。

ノミは自分のからだの長さの二百倍も飛び上ります。ですから人間がノミのまねをしたら丸ビルの高さを約百尺と見積つて、その約十倍も上まで、飛び上らなければならないことになりま

す。海のカキが、殻を開ける力も非常なもので、十五キログラムの重さでじやまをしようとしてもか

のくらんだジアコモは、王様がほんさうに心から大事に思ふものを返禮によこしたのに對していつまでも、うらめしく口惜しく罵りつづけるのでした。

(をほり)

### 植物の種

なはないさうです。人間がカキのこれだけの力をもつてゐるとすれば、頭の上に急行用の機關車をざつと八十臺も乗せることが出来る絶定です。

ニュージーランド植物園のグリーン博士は、近來同市や市の近くに、これまでなかつた植物が七百種もふえたので、いろ／＼と、そのいきさつをしらべて見ました。

これまでは、植物の教科書には、種子がとびひろがるのは、人間、鳥、獸、昆蟲のからだにくつついて、はこばれるのと、それから、風、川や海の流れ、汽車、汽船が、はこんでいくとかいてありました。

しかし、同博士のしらべたところによりますと、今言つた七百種の種子の中には自動車、車體にくつつけてもつて來たものも澤山あるので、博士もおどろいてゐます。

少年少女諸君も、これからは、種子の播布といふ試験問題が出たらば、この自動車をかきおとすと、満點がとれないことになるでせうね。